

実証課題名：「スマート農業を活用した高度輪作体系（3年5作）の構築による超低コスト輸出用米生産の実証」
 経営概要：164ha（主食用米75ha、加工米10ha、飼料用米30ha、小麦33ha、大豆10ha、
 加工用キャベツ等6ha）うち実証面積：164ha

導入技術

- ①アグリロボコンバイン、②自動運転トラクタ、③直進キープ田植機、④水田センサ、⑤ドローン、
 ⑥乾燥機連携システム、⑦営農支援システム

①



②



⑤



目標

売上高の増（約4割増）、輸出用米の生産コスト削減(7,000円台/60kg)、輸出用米の生産拡大(120t/年)

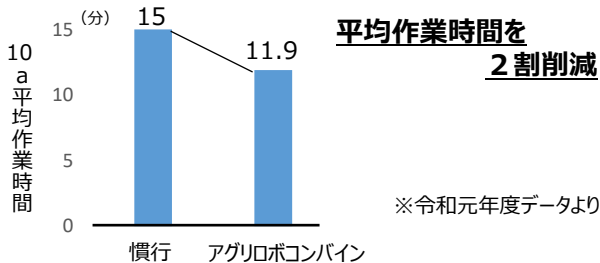
1 初年度の実証成果の概要

- プロジェクト導入前の作付面積164haに対して、主食用米70ha、輸出用米49ha、飼料米13ha、小麦40ha、大豆6ha、その他野菜6haを作付け、計184haとなり、導入後2020年の面積目標である192haに対して、進捗度95%を実施でき、また輸出用米を50ha取り組んだことで、売上高は、1.25倍に向上。
- 輸出用米の生産は、目標の120tに対して、186t（155%増 ハツシモ32.7t、みつひかり111.3t、にじのきらめき20.1t、あさひの夢21.9t）の輸出用米の契約を締結した。

2 導入技術の効果

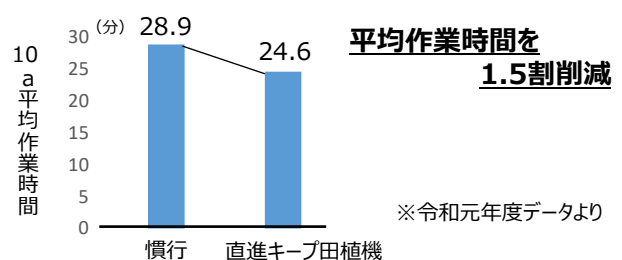
アグリロボコンバイン

- 慣行機（自脱式6条）と比べて、輸出用米区で収穫に係る10a平均作業時間を2割削減



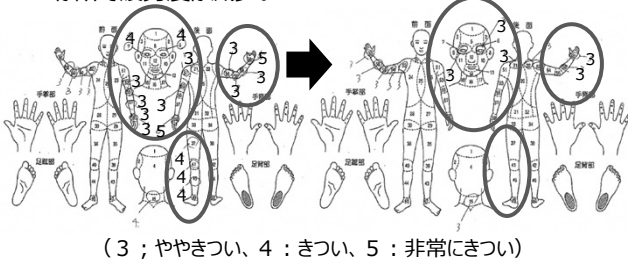
直進キープ田植機

- 条件の悪い深水での移植作業がスムーズで、直進スピードも慣行機より早くすることができ、10a平均作業時間を1.5割削減。



作業の軽労化

- 直進キープ田植機の活用により、慣行期と比較して16か所で疲労度が減少。



アグリノートの導入

- ほ場一覧と併せて、ほ場ごと・作業者ごとの進捗状況が見える化でき、毎月のミーティング等、営農計画管理等に役立てることが可能となった。

<アグリノートに登録した情報の種類及び数>

筆数：838筆、面積：174.8ha
 作付登録数：23 作業項目数：83 機械情報：67
 肥料情報：40 農業情報：53 資材情報：29
 作業者情報：19

3 今後の課題・展望

- アグリロボコンバインにおいて、女性オペレーターなど経験の浅い者でのアシスト自動刈取りを行い、複数のオペレーターを育成するとともに、収量データを参考に施肥設計等を見直し、単収の向上を図り、売上高の増を達成する。
- ロボットトラクタの能力を発揮できるほ場条件や運用方法の検証、2台協調作業の継続的な実証により、作業の効率化を達成し、生産コストの削減を目指す。